

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：34511

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K12236

研究課題名(和文)アトピー性皮膚炎患者が治癒するときの「身体性の変化」を支える方法の開発

研究課題名(英文) Developing a method to support the change of embodiment in the healing process of atopic dermatitis patients.

研究代表者

藤原 由子 (FUJIWARA, Yoshiko)

神戸女子大学・看護学部・准教授

研究者番号：70549138

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではアトピー性皮膚炎の身体性について解釈を洗練させ、その身体性をもとに1例で評価を行った。身体性の解釈においては、身体の内側から発生した痒みや皮疹の症状が外に出てきて、身体上に広がる、他人の視線が皮膚病変のある自分の身体に注ぐなど、14のテーマを挙げた。1例から、新たなパラダイムである「固定化する」ことから派生する<日常生活を対応させていかざるを得ない><自分の皮膚の影響で生きる姿勢が歪められないように、皮膚を覆うものを固定化することで積極的に生きていく>という2つの支障は、悪化し始めたときから既に認められ、症状の初期から体験されていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回、重症には至っていなかった1例における身体性を明らかにすることで、皮膚の機能障害からではない身体性の変化を見出すことができた。特に青年期から成人期にかかる時期には、健康及び生活管理の主体が親から自分自身になることに伴い、生活習慣やリズムの乱れがアトピー性皮膚炎の症状と一体化して体験が累積することが見えてきた。また「自分だけはみ出せない」など、身体性の維持よりも周囲と合わせた行動を取ることが優先されていくなどの療養過程は、成人の再発時期におけるアトピー性皮膚炎看護のアプローチの示唆となり得ると考えられた。

研究成果の概要(英文)：To deepen understanding of the “embodiment” of atopic dermatitis, 14 subjects were presented, including “Itching and rashes first occur internally, then the symptoms appear on the skin surface and spread all over the body”; and “Feeling self-conscious about people staring at your skin lesions.” Moreover, the new problems arising from the “change of embodiment” were discussed, including “Patients are forced to adjust their daily lives due to fixation on the symptoms,” and “Patients wear specific skin-covering materials to prevent their way of life from being hampered by their skin condition, and allowing them to lead a positive life,” with reference to a particular case. It was revealed that these two problems were recognized at the onset of worsening, and experienced at the early stage of the symptoms.

研究分野：慢性病看護

キーワード：アトピー性皮膚炎 身体性 慢性病 看護学 解釈学的現象学

1. 研究開始当初の背景

アレルギーに悩む人の数は年々増加しており、なかでもアトピー性皮膚炎は有症率が増加しており、成人アトピー性皮膚炎患者の重症化、治癒の遅延化が課題となっている。1980年代から国内で起こったステロイドバッシングの影響によるアトピー性皮膚炎の治療の混乱は、日本皮膚科学会によるアトピー性皮膚炎治療ガイドラインの整備、アレルギー対策基本法の成立により、標準的治療がかかりつけ医で施行される体制は整いつつある。一方、表立って患者がステロイドを忌避することは少なくなったが、重症者の数は増え、引きこもりや不登校、職に就けないなど、生活においてアトピー性皮膚炎に大きな影響を受けている患者が未だに多い(片岡, 2011)。アトピー性皮膚炎患者は幼少期に発症し、学童期に治癒する場合もあるが、成人になってから再発している場合が多い(饗庭, 上原, 2009)。成人期に入ってから、患者が標準的な治療薬や新たな療養方法を取り入れることで、治癒傾向に向かったり、症状の寛解時期を迎えた以降に、再度悪化したり、重症の状態に戻ったりしていることが考えられる。

藤原(2018)が行った先行研究では、20~50年間、患者が症状を生きてきた体験は、硬く厚くなった皮膚が患者の身体性として固定し、気持ちや機嫌の悪さとして生き方に根付き、特殊な治療や痒みの不快感を我慢して耐えることが治療をしている実感として定着していることが分かった。例えば、患者は硬く厚くなった皮膚を固定させることで、身体の中にある体力の低下や疲れが外側に皮疹や腫れとして出てきた症状に動きが出ないように、病いの出ている身体を内に入れて閉じ込めるために引きこもったり、活動を制約してきたりしていた。

つまり、皮膚の病いを長く生きてきた患者が、効果的であるとされるステロイド外用薬やタクロリムス軟膏で治療が開始され、皮膚状態が改善するときは身体性が変わる危機であると考えられる。その身体性が変わるときへの介入を踏まえた支援をしなければ、身体上にある硬くて厚い皮膚で安定を保っていた患者にとって、治癒した柔らかくて薄い皮膚は、心もとなく不安定な身体となり、治療の中断や症状の悪化状態に戻る危険性が高くなる。適切な治療方法を行っても、慢性的な皮膚炎症を抱えてきた患者自身が身体性としての治癒した感覚を掴まなければ、新たに回復した生きる状態が再固定されないと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、アトピー性皮膚炎患者が長く症状を繰り返す中で身に付けていく身体性に着目し、皮膚機能の障害や未治癒な状態を抱えた患者が、治癒するときの身体性の変化を支える方法を明らかにする。長く皮膚の病いを生きてきた患者にとって、皮膚状態が改善するときは、今までの身体性が変化する危機を感じることもあることに焦点を当てる。患者固有の身体性が治療によってどのように変化し、変化した身体性を患者が日々の生活において安定したものへと固めていくためには、どのような支援が必要であるかを記述することで明らかにしていくことを本研究の目的とした。

3. 研究の方法

本研究は質的研究のデザインとする。重症度が中等症以上(重症、最重症を含む)の状態にあり、治療を行っているアトピー性皮膚炎患者を対象とした。

対象者にインタビューを治療開始時、治療中、症状の寛解時に行い、治療による経過と症状の状態を追うことによって、アトピー性皮膚炎患者がどのような身体性からどのように変化したのか、変化した身体性をどのように受け入れていくのかについての患者の解釈からデータを得た(図1)。

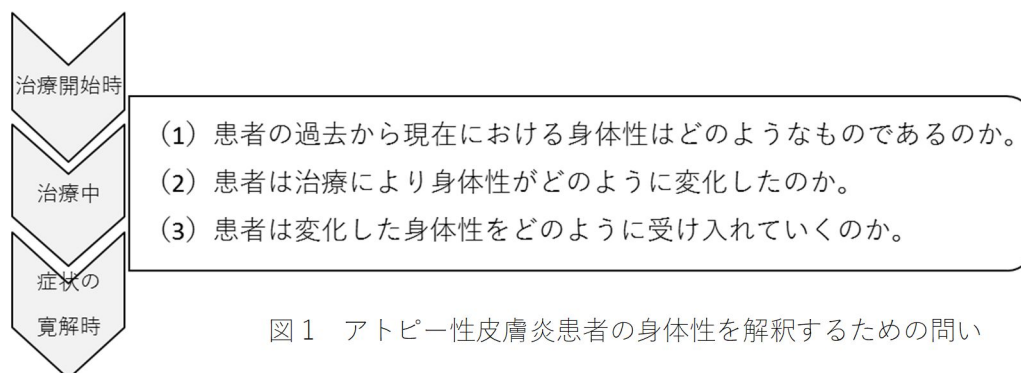


図1 アトピー性皮膚炎患者の身体性を解釈するための問い

本研究で扱う身体性 (embodiment) とは、「人の生き抜く器官であり、意味を帯びた状況に反応する統合体 (Benner, 1989/1999) に患者が住まわっているあり様」と定義する。「身体性」とは、看護理論家である Benner (1994/2006) が看護研究で臨床現場などの状況に起こる現象を捉えるために使用した “embodiment” を和訳した用語で、動詞で “embody”、「体得する・体現する」などとも訳される。例えば、人間が生来身に付けているとされる歩き方なども身体性のあり方が大きく、右と左に足を交互に出すことや、膝の曲げ方、体重のかけ方などは意識しなくても生来備わってきた身体性の一部としてその人に身に付いている。卓越した身体性の持ち主としては、ドライバーの運転やピアニストの演奏などにも同様のことが言えるであろう。本研究では慢性病者のもつ「身体性」に着目し、アトピー性皮膚炎患者の語りから対象者の身体性を明らかにすることで患者がどのように治癒を体験しているかを理解することを目指した。

データはインタビューで「病いの語り」(Kleinman, 1988/1996) を聴くことによって得た逐語録および患者の反応や背景から作成したテキストとした。解釈的現象学 (Benner, 1994/2006) の手法を用いてテキスト解釈を繰り返しながら、痒みや炎症といった皮膚症状を長く経験してきた患者の身体性が、治療による症状の改善を体験することによって、どのように身体性の変化を体験するのかを明らかにし、その身体性の変化を支えるためには、どのような支援が必要であるのかの検討を行った。

患者から聴いた病いの語り (Kleinman, 1988 / 1996)、患者背景をもとに分析するための基本属性 (性別、年齢、家族構成、職業) と治療歴 (既往歴、合併症、罹病期間、重症度) をデータとして得た。研究対象者の症状とその症状における生活への支障の程度を示すものとしては皮膚科疾患特異的 QOL 尺度である Skindex16 日本語版 (檜垣, 2002) を用い、対象者個人の症状と生活への支障の程度、また対象者の特性を把握する指標とした。

データ分析方法は、インタビューで得られたテキストの構成、およびデータの解釈においては、Benner (1994 / 2006) による身体性、状況、時間性、関心、共通する意味の 5 つ視点から、アトピー性皮膚炎患者がどのような身体性を持っているのかについて分析を行う。患者の身体性が変化していくことや、移行していくことを比較検討し、それぞれの患者の身体性の変化におけるテーマの抽出と構成を行った。

4. 研究成果

アトピー性皮膚炎の身体性について解釈を洗練させること、得られたインタビューデータを分析し、過去の研究結果と比較することを行った。

1) アトピー性皮膚炎の身体性における解釈の洗練

先行研究よりアトピー性皮膚炎患者が長年に症状を抱えてきた身体性についての解釈的な考え方を洗練させた。その結果、アトピー性皮膚炎患者が長年に症状を抱えてきた身体性について、14 の項目を挙げて説明できるようにした (表 1)。

(1) 身体の内側から発生した痒みや皮疹の症状が外に出てきて、身体上に広がる、(2) 痒い、痛い、腫れていることを何とかしないといけない、という解決できない辛さを一人で抱え続ける、(3) 皮膚炎からくる不快感を我慢し、耐えること自体が治療をしている実感のようになる (4) 掻いたり、浸出液が貼り付いたりしてできた傷のある皮膚が痛くて身動きできない (5) 症状がさらに悪化しないように身体上に出ている不快を内側にしまい込む、(6) 痒みは止められないため、痒みへの意識を鈍らせる、(7) 身体から剥がれた皮膚が自分の生活した跡に「かわ」として落ちる、(8) 身体表面を覆い、皮膚病変に対する認識をできるだけ意識から遠ざける、(9) 自分の肌は失われているものとして、現在の自身の皮膚を認識することを拒む、(10) 治癒することで本来の自分の肌に初めて出会う、(11) 皮膚が硬くて厚い感覚が慢性化し、とどまる、(12) 症状の不快感や煩わしさが日々の機嫌の悪さとして根付く (13) 痒みや不快を抱えた状態で、人に近付くことができない、(14) 他人の視線が皮膚病変のある自分の身体に注ぐの 14 である。

アトピー性皮膚炎患者は、上記の 14 パターンの内容を個別的に濃淡がある中を体験しており、患者固有の共通する意味 (common meaning) に該当する仮説が成り立った。

表 1 14 のテーマ

1. 身体の内側から発生した痒みや皮疹の症状が外に出てきて、身体上に広がる
2. 痒い、痛い、腫れていることを何とかしないといけない、という解決できない辛さを一人で抱え続ける
3. 皮膚炎からくる不快感を我慢し、耐えること自体が治療をしている実感のようになる
4. 掻いたり、浸出液が貼り付いたりしてできた傷のある皮膚が痛くて身動きできない
5. 症状がさらに悪化しないように身体上に出ている不快を内側にしまい込む
6. 痒みは止められないため、痒みへの意識を鈍らせる
7. 身体から剥がれた皮膚が自分の生活した跡に「かわ」として落ちる
8. 身体表面を覆い、皮膚病変に対する認識をできるだけ意識から遠ざける
9. 自分の肌は失われているものとして、現在の自身の皮膚を認識することを拒む
10. 治癒することで本来の自分の肌に初めて出会う
11. 皮膚が硬くて厚い感覚が慢性化し、とどまる
12. 症状の不快感や煩わしさが日々の機嫌の悪さとして根付く
13. 痒みや不快を抱えた状態で、人に近付くことができない
14. 他人の視線が皮膚病変のある自分の身体に注ぐ

2) 1 例の分析と検討

対象者の選定方針および予定者数は、本研究において同意が得られた通院または入院する 20 歳から 64 歳までのアトピー性皮膚炎患者 10 名前後を対象とし、アトピー性皮膚炎患者の代表的事例としての身体性の変化を比較検討できるように、対象者の選択においては、性別や年齢、職業は対照的な事例を選択しながらリクルートを行う方針とした。アトピー性皮膚炎という診断が既になされている患者を選定し、病いを語ることに身体、精神状況に無理が生じることがなく、会話が可能な患者を研究対象者とした。

COVID-19 の感染拡大の影響で病院でのフィールドワークができなくなったこと、研究期間途中で対象としていた皮膚科の入院病床が COVID-19 感染者の病床を優先させるために無くなった影響などから、本研究で得られたデータ数は 1 例となった。10 歳代後半男性のインタビューデータが 2 回得られたため、1 例の分析後、過去の研究結果と比較する形で検討を行った。

(1) 1 例の身体性の分析

「地元の皮膚科で治る」「塗り薬で治る」と収束できていた研究協力者の身体は、「塗り薬を塗る範囲が広がる」ことで生活上の変化を感じ、高校生までは親の心配や保護のもとで、食べることや寝ることが乱れることなく送ってこられた生活が「リズムが崩れる」ことを感じた。そして、皮膚のことを気遣うために皆と違う行動や服装をすることができないといった「自分だけはみ出すことができない」状況になっていることが出てきた。また、皮膚が痒いときには眠れなくなり、眠れないと疲れ、痒くなるという悪い条件が重なり合い統合した「皮膚が負ける」という身体性があることを見出すことができた。

(2) 先行研究結果との比較検討

先行研究で、アトピー性皮膚炎患者が長期に症状を抱えている身体性とは、「固まる」という新たなパラダイムがあることと比較した(藤原, 2020)。治癒するときに変化する身体性とは、生理的な皮膚においては「硬くなる」、「厚くなる」という現れ方をし、患者の習慣や気分においては「定着する」、「根付く」となった。病気が固定するというあり方で「安定化」したり、うつる病気ではないという「固まり方」、病を「公にする」という社会的な固まり方も含む。

今回比較したのは、アトピー性皮膚炎患者が時間をかけて「固定化する」ことで日常を落ち着かせている治癒へ向かって固定化するプロセス、固定化した結果、固定化した後に患者に生じる新たな支障である。この患者にとっての新たな支障は、身体性の変化の中で患者に起こることである。1. 症状の固定化に合わせて、日常生活を対応させていかざるを得ない患者の状況がある、2. 自分の皮膚の影響で生きる姿勢が歪められないように、皮膚を覆うものを固定化することで積極的に生きる、3. 症状の広がりを予防するための活動の固定化により、日常の選択肢や社会参加への可能性が狭まる、4. 炎症の慢性化した皮膚を安定したものに固定化することで、いつもとは違った身体の異変に気付きにくくなる、という 4 つの新たな支障と比較する(表 2)。

表2 今回比較した「固定化した後に患者に生じる新たな支障」

1. 症状の固定化に合わせて、日常生活を対応させていかざるを得ない患者の状況がある
2. 自分の皮膚の影響で生きる姿勢が歪められないように、皮膚を覆うものを固定化することで積極的に生きる
3. 症状の広がりを予防するための活動の固定化により、日常の選択肢や社会参加への可能性が狭まる
4. 炎症の慢性化した皮膚を安定したものに固定化することで、いつもとは違った身体の異変に気付きにくくなる

先行研究で重症を経験したアトピー性皮膚炎患者は、治りにくく重症化しやすい背景には、一旦治癒したとしても炎症が再燃することへの対処がうまくいかないこと、治癒傾向になったとしても身体性が変わっていくことに対する不安から再びもとの状態に戻りやすいことが見えてきた。皮膚に病変のあることが感覚的に固定化することで、病変のある皮膚のほうが返って安定した状態になることや、治癒過程において患者が病いのままでいることを収束させるために、日常の中で活動内容や範囲を制限することがあった。

特に(1)症状の固定化に合わせて、日常生活を対応させていかざるを得ない。(2)自分の皮膚の影響で生きる姿勢が歪められないように、皮膚を覆うものを固定化することで積極的に生きている、という2つの先行結果に対して、今回の研究データにおいてその兆候は、悪化し始めたときから既に認められ、症状に合わせて日常生活が変わっていかざるを得ないこと、皮膚を覆うことで積極的に日常を続ける活動が症状の初期から体験されていることが明らかになった。

今回、重症には至っていなかった1例における身体性を明らかにすることで、皮膚の機能障害からではない身体性の変化を見出すことができた。特に青年期から成人期にかかる時期には、健康及び生活管理の主体が親から自分自身になることに伴い、生活習慣やリズムの乱れがアトピー性皮膚炎の症状と一体化して体験が累積することが見えてきた。

また「自分だけはみ出せない」など、身体性の維持よりも周囲と合わせた行動を取ることが優先されていくなどの療養過程は、成人の再発時期におけるアトピー性皮膚炎看護のアプローチの示唆となり得ると考えられた。

引用文献

1. 片岡葉子(2011). 小児皮膚疾患診療のエッセンス Evidence にもとづく小児アトピー性皮膚炎の理解と治療 ,大阪小児科医会会報,4,16-18 .
2. 藤原由子(2019). 重症アトピー性皮膚炎を経験した患者の症状と生活への支障の体験についての解釈的説明,2018年度兵庫県立大学大学院看護学研究科博士論文 .
3. Benner , P. , Wrubel , J. (1989). 現象学的人間論と看護 .(難波卓志 訳). 東京：医学書院 .(1999).
4. Kleinman , A. (1988). 病いの語り 慢性の病いをめぐる臨床人類学 .(江口重幸,五木田紳,上野豪志 訳). 東京：誠信書房 .(1996).
5. Benner , P. (1994). ベナー解釈学的現象学 健康と病気における身体性・ケアリング・倫理 .(相良ローゼーマイヤーみはる 監訳). 東京：医歯薬出版 .(2006).
6. 檜垣祐子(2002). Skindex-16 日本語版 ,MPR R 株式会社 .
7. 藤原由子(2020). 重症アトピー性皮膚炎を経験した患者の症状と生活への支障の体験 解釈学的現象学に基づいた範例の探究 ,日本慢性看護学会誌,14(2),45-52 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 神崎初美, 松本麻里, 金外淑, 元木絵美, 三浦靖史, 松本美富士, 泉キヨ子	4. 巻 30巻3号
2. 論文標題 リウマチ看護師の看護実践能力尺度の開発	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床リウマチ	6. 最初と最後の頁 166-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 元木絵美	4. 巻 11(2)
2. 論文標題 慢性看護のエビデンス(第9回) リウマチ膠原病患者の看護に関するエビデンス 薬物治療をうける関節リウマチ患者への支援	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本慢性看護学会誌	6. 最初と最後の頁 99~104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤原 由子	4. 巻 14
2. 論文標題 重症アトピー性皮膚炎を経験した患者の症状と生活への支障の体験	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本慢性看護学会誌	6. 最初と最後の頁 2_45~2_52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34523/jscicn.14.2_2_45	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐々木智絵, 井川幸子, 奥井早月, 米田昭子, 伊波早苗, 添田百合子, 馬場敦子
2. 発表標題 循環器疾患患者へのエンボディメントケア エンボディメントケア発展の可能性
3. 学会等名 第13回日本慢性看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 奥井早月、横内 光子、洪 愛子
2. 発表標題 糖尿病看護における看護実践の評価指標に関する文献検討
3. 学会等名 第45回日本看護研究学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 奥井早月
2. 発表標題 治療を継続している2型糖尿病患者の療養行動に対する意味づけ
3. 学会等名 第13回日本慢性看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤原由子
2. 発表標題 アトピー性皮膚炎患者の症状と生活への支障の体験における解釈学的現象アプローチによるテーマ分析
3. 学会等名 第12回日本慢性看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤原由子
2. 発表標題 アトピー性皮膚炎患者の症状と生活への支障の体験における解釈学的現象学アプローチを用いた範例の探求
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐佐木 智絵, 米田 昭子, 上野 聡子, 藤原 由子, 馬場 敦子, 魚里 明子, 河田 照絵, 曾根 晶子, 伊波 早苗, 添田 百合子, 片岡 千明, 野並 葉子
2. 発表標題 糖尿病患者へのエンボディメントケアプロトコールによる介入の効果検証 Effectiveness Researchの経過報告
3. 学会等名 第22回 日本糖尿病教育・看護学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 福田 美佐子, 藤原 由子
2. 発表標題 不登校であったアトピー性皮膚炎患児とのかかわり患児が自ら問題を明確化し、目標を持ち変化した事例
3. 学会等名 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 藤原由子
2. 発表標題 アトピー性皮膚炎患者の症状と生活への支障の体験における解釈学的現象学アプローチによるテーマ分析
3. 学会等名 第12回 日本慢性看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 永井 由巳, 東野 正明, 中嶋 正博 他, 中西 健史, 池田清子, 畑中あかね, 川口麻衣, 藤原由子, 渡辺 美和他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 メディカ出版	5. 総ページ数 488
3. 書名 ナーシング・グラフィカEX 疾患と看護 眼/耳鼻咽喉/歯・口腔/皮膚	

1. 著者名 野並葉子、森 菊子、藤原由子、元木絵美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 照林社	5. 総ページ数 448
3. 書名 成人看護 慢性期・回復期 第2版	

1. 著者名 野並葉子、森 菊子、藤原由子、元木絵美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 照林社	5. 総ページ数 464
3. 書名 成人看護 慢性期・回復期 第2版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	野並 葉子 (NONAMI Yoko) (20254469)	神戸女子大学・看護学部・教授 (34511)	
研究分担者	元木 絵美 (MOTOKI Emi) (70382265)	神戸女子大学・看護学部・講師 (34511)	
研究分担者	奥井 早月 (Okui Satsuki) (00783002)	神戸女子大学・看護学部・助教 (34511)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------